

第二章 一九八〇年代に生まれて

一九八〇年代に生まれて、ひとり親で労働者階級というありきたりな家庭で育った。生活を公的扶助に頼ることはよくあることで、公営住宅に住み、学校給食は無料だった。〔英国では低所得家庭の子どもは給食費が無料に〕。父はカリブ系イギリス人で、母はスコットランド人とイングランド人の間に生まれた。そして父と母は結婚することなく一〇代で俺が生まれる前に別れた。父は幼少期の一時期を児童養護施設で過ごし、母は「黒んぼ」と付き合ったことで父親に実質的に絶縁された。初めて人が刺されたのを見たのは一二歳か一三歳のときで、そのころ初めて警官の身体検査を受けた。マリファナを最初に吸ったのは九歳のときだ。「おじさん」——実の叔父や家族の友人のこと——の多くは刑務所に入った。俺の生い立ちは、若くして死んだか、大人になっても多くの時間を刑務所で過ごしている同世代の人々と表面的にはほとんど変わりはない。

生まれたのはウェストサセックス州のクロリーだが、物心がつく前にロンドン西北部のカムデンに移り、幼少期と一〇代をそこで過ごした。カムデンでは一三〇もの言語が飛び交い、貧富の差の大きさは国内でトップクラスだ。学校では、貴族や大金持ちの子ども、難民の子ども、見るからに栄養失調の子ども、父親にかわってドラッグを売っている男の子が一緒に机を並べていた。イギリスで人種や階級、文化を顕微鏡を覗くように観察するならカムデンこそ格好の場所だろう。

一九八〇年代、イギリス連邦

「イギリスとその元植民地国によるゆるやかな」

の「本国」であり、歴史上初の正

真正銘の世界帝国の本拠地であり、産業革命の発祥の地であり、国際金融の中心地である場所に俺は生まれた。これは何を意味しているのだろうか？ どのような社会的、歴的要因が両親を出会わせたのだろうか？ 父は、ウィンドラッシュ世代

「一九四八年から七〇年代初頭にかけて、ジャマイカを中心とする元英領が英連邦加盟国のカリブ海諸国から合法的に英国にやってきた人々」の一人としてイギリス本国にやってきた二人のアフリカ系ジャマイカ人移住労働者の間に生まれたイギリス人である。母は軍人の子どもとしてドイツに生まれ、香港で幼少期を過ごし、

一〇代初めにのちに俺が生まれるイギリスの小さな町に移ってきた。

両親の出会いは、イギリス帝国

「一般的に使われる「大英帝国」と同じ意味だが、本訳書では統一して「イギリス帝国」を用いる」

の侵略、マクロ経済の変

化、奴隷反乱、脱植民地化、そして労働者の闘いといった数えきれない出来事が秘められている。俺は、少なくとも欧米の基準では貧しい家庭に生まれた。貧しい家庭に生まれ——母は「白人」だったが——黒人として育った。それも、人種をめぐるイギリス国内の歴史上、もっとも激動の一〇年と言える時代に。

俺が生まれた八〇年代は、人種混合の子どもがある種のアッシュンアクセサリーとして受け入れられるようになる前だった。母が出産後輸血を必要とした際、病院の看護師は白人の母に「ニガーの血」を輸血すると請け合った。そう、八〇年代にはポリティカル・コレクトネス

「人種・性・ジェンダー・宗教・身体障害などに對する差別を含まない言語表現を重視する態度」など存在しなかったのだ。

八〇年代はサッチャリズムとレーガンズム

「英サッチャー政権、米レーガン政権の保守的な政治路線。ともに「小さな政府」をめざした」

が台頭した一〇年

でもあった。「資本主義の黄金時代」は一九七三年のオイルショックによって終わり、八〇年代

になると戦後の福祉国家制度が後退しはじめ公有資産の民営化が増加した。無料の大学教育や低家賃の公営住宅のおかげで裕福になり、戦後できた国民保険制度（NHS）
「税金で運営され全住民が原則的に無料で医療を受けられるイギリスの医療」によって文字どおり生命を維持してきた世代の人々が、「自助努力」という個人主義的論理を信奉するようになった。

またこの一〇年は、史上最強の軍事大国アメリカが、カリブ海の極小の島国グレナダで起きた社会主義革命の将来の発展可能性という巨大な脅威によって存亡の危機にさらされ「一九八三年、左こったグレナダに米国が軍事介入を行ない革命政府を打倒した」、また世界の民主主義の指導者を自称する国々が、ニカラグアから南アメリカまでのジェノサイド的な政権を支援していた時代だった——ただしそれは八〇年代に限ったことではないが。トマ・サンカラ「一九四九—八七年。ブルキナファソの革命家」が暗殺され、ベルリンの壁が崩壊し、マイケル・ジャクソンが白くなりはじめ、アメリカでMOVE「一九七〇年代にフィラデルフィア州で設立された黒人解放運動組織」に警察に爆撃されたのもこの一〇年間のことだ。控えめに言っても、八〇年代はかなり波乱に満ちた時代だったのだ。

黒人イギリス人にとって一九八〇年代は、八一年のニューヨークロスハウス火災／虐殺事件で幕が開けた。人種差別主義者による放火が原因だと考えられているこの火災は、黒人少女イヴォンヌ・ラドックの一六歳の誕生日パーティーが開かれていたニューヨークス通り四三九番地で起こった。パーティーの参加者のうち、その少女を含む一三人が焼死し、生き延びた一人のちに自殺した。遺族の多くは、（一）この火事は放火によるものあり、（二）警察が適切な捜査を怠り、遺族を被害者ではなく容疑者のように扱った、と現在も主張している。火事は放火が原因だとい

黒人コミュニティの言い分はまったく正当なものだった。この事件が起きる前には、ロンドン南東部の同じ地域一帯でレイシストによる同様の放火事件が続いていたのだ。

当時首相だったマーガレット・サッチャーは、イギリス人であるはずの亡くなった子どもたちとその家族に哀悼の意をしめさなかった。サッチャーは、黒人は人間未満の存在だという信念を根底にもつ南アフリカのアパルトヘイト政府を支持していた。そんな人物が黒人イギリス人の子どもの死を心から悲しむことはできなかったのである。その点、少なくともサッチャーは一貫していた。亡くなった子どもたちに一分間の黙禱もくごうが捧げられることもなく、現在ほとんどのイギリス人はこの事件があったことすらまったく知らない。ニュークロスハウス火災は、戦後イギリスで一度に最大の人命が失われた事件の一つであるにもかかわらずだ。

また同じ年、イギリス国籍法が成立した〔非白人の英連邦市民の英国市民権取得要件が厳格化された〕。一九六二年以降、人種差別的な意図をほとんど隠すことなくつくられてきた一連の法律の最後となるのがこの法律だ。カリブ系イギリス人は、かれらの多くが長い間そう疑っていたように、自分たちがまさに二級国民だと実感するようになったが、それでも黙ってうなだれているつもりはなかった。ニュークロスハウス火災は、イギリス史上最大の黒人デモをもたらした。平日に二万人が国会議事堂に押し寄せて、次の一〇年間に起こる数々の騒乱を予言したのだ。人々が唱えたスローガンは、「正義がなければ、血が流れるぞ (Blood a go run, if justice na come)」やがてこの言葉は現実となった。

その後俺が生まれた一九八〇年代には、八四年から八五年にかけて炭鉱労働者のストライキが起き、また反アパルトヘイト闘争もたえず続けられただけでなく、国内のほとんどすべてのカリ

ブ系および「アジア系」地区で暴動が次々と発生した。こうした騒乱のなかで、とくに有名なのが八一年のブリクストン暴動だ〔ロンドン南部にあるブリクストンは、戦後「ウインドワッシュ世代」が多く、この暴動の要因となったのは「sus法（不審者法）」とスワンプ81作戦である。「sus法」は、一八二四年に制定された「浮浪者取締法」を復活させたもので、犯罪を意図しているという疑いだけで人々を逮捕することを可能にしていた。スワンプ81とは警察の人種差別的で大規模な「ストップ＆サーチ」〔犯罪抑止を名目に、警官が無作為に職務質問と身体検査を行うこと〕作戦のこと、

「sus法」が具体的な形をとったものだった。一九八五年、ブリクストンはふたたび燃えあがった。このときブリクストンに火をつけたのは、チェリー・グロースが息子を探しに家にやってきた警官に撃たれ下半身不随となった事件だ。そのたった一週間後にはシンシア・ジャレットが息子にかんする警察の自宅捜索を受けた際に心臓発作で死亡し、それをきっかけにブロードウォーターファーム暴動が発生、警官一名が死亡した

〔ブロードウォーターファームは、カリブ系・アフリカ系が多く住むロンドン北部トッテナムにある公営住宅地〕。

俺はグロースとジャレットのいずれの家族とも知り合いだ。また俺は、二〇一一年に警察の自宅捜索中に死んだレゲエアーティスト、スマイリー・カルチャーの息子と一緒に育った。俺がこんな個人的な人間関係の話をするのは、かれらが抽象概念や単なるニュースの登場人物ではなく、一つのコミュニティ——俺たちのコミュニティの一員だったことを言いたいからだ。二〇一六年、元サッカープレミアリーグ選手のダリアン・アトキンソンが警察にスタンガンで撃たれて死んだ。イギリスで、かつての人気ミュージシャンや引退したサッカー選手が警察の捜査を受けて命を落とすなんて、まず黒人コミュニティ以外では考えられない。

一九八〇年代に国家暴力や人種差別、貧困、階級的抑圧に対して怒りが爆発したのは、決してロンドンだけではなかった。一九八〇年、イングランド南西部の都市プリストルではセントポールズ暴動が起こり、八一年には北西部の都市マンチェスターのモスサイドとリヴァプールのトクステス、八一年と八五年には中部の都市バーミンガムのハンズワース、八一年と八七年には北部の都市リーズのチャペルタウンで暴動が起こった。

こうした怒りの爆発がどれほど大きな損害額をもたらしたかは俺にはわからないが、当時から十分に長い年月が経ったいま、暴動の背景にはきわめて差し迫った社会的、政治的要因があったことに異議を唱える研究者はほとんどいない。実際そうしたことについては何冊も本が書かれている。一連の出来事を直接受けて、政府の政策や警察の取り締まり、訓練内容が見直された。ただ、イギリス国家が八〇年代という時代から実際にどのような教訓を得たのかはわからないままであるが。

俺よりほんの少し若く、比較的多文化主義的な環境に生まれ育った人々は、この国で黒人が最低限の敬意を勝ちとったのはごく最近のことだということを忘れがちだ。だが、八〇年代に生まれた俺は、決して忘れることはない。観客が投げたバナナの皮をサッカー選手のジョン・バーンズ〔ジャマイカ生まれの元^元イングランド代表選手〕が蹴り飛ばす姿が悪名高い写真に撮られたとき、俺は五歳だった。イングランドでもっとも偉大なサッカー選手の何人かが、競技場の数万人の観客の目の前で、こうした辱めを受けたのだ。ほとんどの観客は、そのような侮辱行為を何の問題もないどころかおもしろいとすら感じているようだった。俺はそういう場面を毎日のように見て育ったのだ。

俺はシリル・レジス〔一九五八―二〇一八年。英国サッカー界で初めて注目を集めた黒人選手の一人として、白人による激しい人種差別的攻撃を受けた〕と個人的に知り合いだったが（どうか安らかに眠りください）、彼に届いた手紙に銃弾が入っていたこともあった。黒人選手がイングランド代表としてプレーしたいと望んだだけで、自分たちの「サポーター」や同国人であるはずの人々から殺害の脅し^{おど}を受けたのだ。黒人を猿と結びつける発想はどこから来たのかを公の場で問う人はいなかった。もしそうしていたなら、俺たちはその発想の歴史的な起源について、また野蛮人神話や文字どおりの人間動物園〔一九世紀後半に登場した、欧米人が「野蛮」「未開」とみなし、たおにもにアフリカの人々を動物園のような環境で展示したもの〕について話す必要があっただろう。

俺はこの世界について何の考えももたずに生まれたが、世界の側が俺のような人間についてある種の考えをもっているのは明らかだった。この世界は、何も知らなかった俺に、人種や階級がどういふものかをすぐに教えた。その偏見があまりにも理不尽な形で現れるために、俺は人種や階級というものの正体を探索せざるをえなくなったのだ。俺はそれを学ぶために人生で少ない時間を費やすことをとくに望んだわけではなかった。子どものころに夢みたことでは決してなかった。だが俺は、まだとても幼いころにそうすることを余儀なくされたのだ。バーンズがあのバナナの皮を蹴り飛ばす姿を見たときに。あるいは、母の稼ぎが少なくて電気も暖房もつかない暗い部屋で凍えながら座っているときに。そのとき俺はこうした経験に特別な意味があることはわかっていたが、それをどう言葉にすればいいのかはまだわからなかった。

俺は一九八〇年代に生まれた。国会議員が俺たち――つまり非白人のイギリス連邦市民――を、もと居た場所へと送還すべきだと議論していた時代に。俺たちの出身地が法的にもはやイギリス

領でなくなり、国内の俺たちの存在が問題視されるようになったのだ。祖母たちの手を借りて国民保健制度ができあがり、祖父たちの働きで公共交通機関が発達したいま、国会議員は公然と俺たちを送還する話ができるようになったのだ。俺たちはもはや必要ないもの、余剰労働力、需要に対する供給過多、資本にとってもう役に立たない存在とされたのである。

「人種」というものが全体的にどう管理されているか——メディアが広めるプロパガンダ、黒人でいっぱいの精神病院、深刻な失業、白人にくらべて圧倒的な数の投獄率や停退学処分——を理解するには、そもそもなぜ俺たちがイギリスに呼ばれたのかという文脈を理解する必要がある。

俺たちはみな、イギリス社会の富にあずかるためにここに呼ばれたわけではなかった。それは当時の白人の大多数にも手の届かないものだったのだ。俺たちがここに呼ばれたのは、第二次大戦終了直後の数年間に必要だった単純労働で俺たちを働かせるためだった。そして戦後イギリスのあらゆる政権——ケン・ローチ監督による二〇一三年のドキュメンタリー映画『1945年の精神』「クレメント・アトリー率いる戦後初期の労働党政権下で数々」に出てくるアトリー政権の面々も含め——は、そんな限られたことを期待された茶色の肌をしたイギリス国民が本国に入ることによる長期的な影響を強く懸念していたのだった。

社会学者のアダム・エリオット・クーパーが言うように、イギリス政府とその教育制度は、白人イギリス人に対し、俺たちがイギリスに来たのではなく、むしろ「イギリスの方がわれわれのところにやってきた」ことを教えなかった。また、福祉国家やそのほかの階級格差の改善を可能にしたイギリスの富は、少なからず植民地でつくられたコーヒーやタバコや綿花、そこで採れた

ダイヤモンドや金、そして植民地人民の汗と血と命の犠牲によって築かれたことも説明しなかった。俺たちの祖父母は外国からの移民ではなく、イギリスのパスポートをもった真正正銘のイギリス国民であり、しかもその多くが第二次世界大戦をイギリス軍で戦った元兵士で、遠く離れた植民地の一つから本国へと移動してきただけなのだとは、誰も教えなかった。また、植民地のカリブ人やアジア人が、「イギリスはあなたの母国なのだ、そこは平和と正義と繁栄の発祥の地で、あなたもそこに行けば愛する母国の温かな腕の中に迎えられるのだ」と教えられたことを、誰も白人イギリス人に言わなかった。

同様に、実際にはほとんどの白人イギリス人が貧しいことや、イギリス国内では過酷な労働搾取や階級間対立がずっと続いてきたことを、俺の祖父母や植民地のほかの人々に教える人もいなかった。なにしろ植民地では、白人とは上流階級であり、豊かな生活を送っている人間なのだと考えられていたのだ。俺の祖父母がジャマイカで目にしていた白人は支配階級の間人だけだったことを思えば、こうした考えはまったく自然なものだった。俺の叔父は「イングランドで白人が道を掃^はいてるのを見たときにや、信じられなかったな」とそのとき受けたショックを語った。四歳の叔父が想像していたイギリスは、五〇年代にイギリスの港へ降り立って貧しい白人たちを目にした瞬間に壊されてしまったのだ。とんでもないところに来てしまった——いったい何が起きているのだ？

また叔父は、イギリスに来て一週間も経たないうちに、自分が「黒んぼのクソガキ」だということを知った。叔父が駄菓子屋にいたとき、通りがかりの大人が教えたのだ。植民地の人々がイ

ギリスこそがこれらの母国だと教えられていた一方で、白人イギリス人のほとんどは、このニガーども——ちなみに当時はアジア系も「ニガー」だった——はバナナ運搬船ボートでやってきて身のほど知らずにもこの国にたかり、「かれらの」の仕事を奪い、「かれらの」の女を盗む連中だと考えていたのだ。現実にはイギリスがドイッ系の王室、ノルマン系の支配層、ギリシャ系の守護聖人をもち、ローマ／中東に由来する宗教を信仰し、インド料理を国民的料理として好み、アラブ／インドに由来する数字とラテン系アルファベットを使い、多民族を擁する世界規模の帝国であることを前提としたアイデンティティをもっているのだとしても、そんなことはこの際関係ない——「外国人は出ていけ」なのだ。

イギリスには歴史上つねに多くの移民がやってきたことや、多くの「白人」イギリス人が実際には一九世紀にやって来たユダヤ系、東欧系、アイルランド系移民の子孫であること★、また戦後の「大量移民」時代にもっとも多くの移民をイギリスへ送り出したのはアイルランドやヨーロッパ諸国だったことも関係ない。そして当然、海外に出た多くのイギリス系移民や入植者——「国外在住者」という都合のいい名称を与えられた人々——には一切触れてはならないのである。

俺たちの祖父母、さらにはイギリスで生まれたその子どもたちに対するイギリス人の反応は、いつも決まって理不尽な嫌悪感だった。戦後移民のパイオニアとしてのウインドラッシュ世代の物語がイギリス国家の物語に公式に組みこまれた現在でも、人々がかれらが受けた扱いについて少しでも知ったなら、間違いなく怒りや困惑を感じるだろう。戦後のイギリスに労働力としてやってきたウインドラッシュ世代を待っていたのは、かれらの茶色あるいは黒い肌だけを理由と

した事実上の人種隔離、罵詈雑言ばりぞうごん、暴力、そして殺害だった。

さらには移民法により、非白人のイギリス連邦市民のイギリス市民権取得が制限されてしまった。ただ白人でないというだけで、数億人のイギリス国民から市民権とイギリスのパスポートが保障する移動の自由が奪われたのだ。そして、一九六八年と七一年の移民法には「祖父条項」がほとんどその意図を隠すことなく組みこまれた（祖父母や親、あるいは本人が英国生まれの英連邦市民。これは英国の移民法の規制を大幅に免れることになった）。これにより、明白に人種的な言葉を使うことなく、イギリス連邦の白人の移動の自由は維持されたのだ★。

こんな状況でも、俺の祖父ブリンズリーは一生懸命働き、少しずつ金を貯め、やがて郊外に家を買った。祖父は、イギリス資本主義が報酬と引き換えに働きの労働者に要求することを完璧にやり遂げ、公平に言って祖父はその報酬を得た。近所の住民はその「ニガー」を自分たちの通から立ち退かせようと全員で署名までしたのだが、祖父は（俺にはいま一つ理解できない理由により）そこにとどまった。そもそもまわりが公営住宅ばかりのなか、祖父の家は唯一の持ち家だったので、それを立ち退かせるのは無理な話だったのだ。祖母のミリセントもこつこつ貯金し家の購入資金の足しにしたが、祖母はロンドンに住みつづけた。もっともこれは、ロンドンの労働者が家を買うことに少しでも希望がもてた時代の話だ。いまは住宅価格が跳ね上がり、そうした希望は完全に失われてしまった。

一九八〇年代はヒルズボロの悲劇で幕を閉じた。これは八九年に、イングランド中部の都市シェフィールドのヒルズボロスタジアムで開催されたサッカーFAカップ準決勝、リヴァプール対ノッティンガムフォレストの試合中に九六人の観客が圧死した事件だ。惨劇の直後、全国紙と

警察は、リヴァプールのファンは酔っ払いのフリーガンだという粗雑な階級的偏見を駆使して、かれらに事故の責任をなすりつけた。サン紙に至っては、リヴァプールのファンが死体から金品を盗んだり、警察に向かって小便したとまで主張した。これに怒ったリヴァプールの人々は現在に至るまでサン紙をボイコットしている。二〇一六年、遺族が二七年間にわたって不断に続けてきたキャンペーンの結果、犠牲者は警察の過失により不当に亡くなったという判決がようやく下された。

それでは、いま俺たちはどんな時代に生きているのだろうか？ 俺が生まれた八〇年代から何も変わっていないのか？ イギリスの支配層のイデオロギーはまぎれもなく貴族的特権と白人性を基本的前提としているが、イギリスのインナーシティ「人口が密集し住環境が悪く、都市部の低所得者地域」、とくにロンドンはいまや多民族化の実験が「欧米」世界でも指折りの成功を収めた場所であることもまた明らかだ。右翼的な報道機関がいくらそうでないふりをしてもそうなのである。多民族的なイギリスは、ポール・ギルロイ「英国のカルトゥーリス」の言葉を借りれば、俺たちイギリス人の「共生」文化――すなわち、大きな問題に直面しても基本的には友好関係を保つ、市井（しやう）の人々がもつ日常的な良識のたまものなのである*。

イギリスは驚くべき矛盾を抱えた国でありつづけてきたのだ――人種差別と反人種差別、貧しい人々への徹底した軽蔑とキリスト教の慈善事業、世界有数の大学をいくつも擁しながらも頑なに学ぶことを軽蔑し、「アングログローバリゼーション」を推進しながら、他民族が自由に移動する権利をいつも本気で嘆（なげ）いている市民たち。世界最大規模の奴隷貿易を行なったイギリスに、ほかの主要なヨーロッパの奴隷貿易国をはるかに上回る規模の奴隷制廃止運動があったのはなぜか？ その二世紀後、自国の政府や企業・銀行が南アフリカのアパルトヘイト体制を支持しているなかで、国内の「ラディカル」な運動組織がアパルトヘイトにあれほどの反感をしめし、強力な反対運動を組織できたのはなぜなのか？（とはいえ、皮肉なことにイギリスにおける反アパルトヘイト闘争の内部にも人種的対立があった*。）

イギリスには競合する二つの伝統が存在する。一つは自由や平等、民主主義の思想に根ざした伝統。もう一つはこうした考えを単なるきれいな事とみなし、便利なときには自在にそれを口にはするが、マキャベリ風に権力を維持するためにはそれに背くような伝統だ。だからイギリスは世界で最大規模のイラク戦争反対デモが起きた一方で、その世界中に影響をもたらす問題について自国民の意見を完全に無視するような政府をもったままにいるのだ。

イギリスには深刻な階級的不平等が根強く存在する。すべての人々が満足できる社会を期待するのはおそらく非現実的だとしても、イギリスの階級制度はヨーロッパの基準からみてもきわめて悪質である。一方、八〇年代以後のイギリスから人種差別がなくなったわけではないが、俺が生まれた八〇年代に黒人系、アジア系のコミュニティが行なった闘争がきわめて重要な改革をいくつも生み出した結果、間違いなく俺の世代はそれまでとは違う形で「人種」を経験し理解するようになった。ゴリウオーグ「人種差別的に黒人を標した子ども向けの人形」やバナナの皮は、この国の黒人の日常には登場しなくなった。それは警察の特別巡視隊（SPG）「一九六五年にロンドン警視庁が犯罪防止や公共秩序の維持を目的」に設置。おもに移民の監視やカリブ系地区の取り締まりにあたったについても同様だ。SPGはきわめて暴力的で、俺より歳上の男性はほとんどみなその被害を何度

も受けた。もちろんいまも警察の暴力は存在するが、状況は三〇年前よりはるかによくなっているという認識は——少なくともいまのところ——多くの人々に共通するものだろう。

親の世代が体を張って戦ってくれたおかげで、かつては日常茶飯事だった「ニガー狩り」や「パキバッシング」〔「パキスタンをはじめとする南アジア系の移民に対する蔑称」を起こした〕やスキンヘッド〔「パキ」は南アジア系の移民に対する蔑称、若者集団、移民や外国人労働者を攻撃した〕と戦ったときの傷跡がいくつも残っている。俺の身体にはそうした傷跡はない。とはいえ最近勢いを増してきたレイシストは決して見くびってはならない存在であり、人種差別的暴力はふたたび増加傾向にあるようだ。

その理由の一つには、これまで表面的にはかなり進歩し、そして本当の意味での進歩も少しはあったにもかかわらず、人種差別をめぐる社会の認識がいまなお未熟なことがあげられる。社会における人種をめぐる議論は、人種差別をあくまで個人間のモラルの問題としてしか考えないよう方向づけられているのだ（もし人種差別自体を認識できればの話だが）。善人にレイシストはおらず、悪人だけがレイシスト。この巧みな二分法は、現実的な議論を一切回避するのに大変役に立つ。だが法と教育の不平等というような構造的暴力や、国家による人種の搾取の歴史を抜きにして、偏見から出る個人の単純な差別行為について考える意味はほとんどない。簡単に言えば、俺たちは貧しい人々が行なうような人種差別行為だけを問題にするように教育されているのである。

よほど帝国主義的な歴史家であっても、どこかのフリーガンがプレミアリーグのサッカー選手

を「黒人マンコ野郎」と呼ぶのは悪いことだと言うだろう。しかし、一方でこの種の歴史家は、イギリス帝国の大量殺戮（スラウ）で白人至上主義的な海賊行為の歴史をこまかす些細（さいさい）なものであるかのように描き、本質的には称賛することに仕事のほとんどを費やしているのである。イギリス帝国はインドで数千万人もの人々を餓死させ、さらに多くの場所でも多くの人々を奴隷にしたり拷問したりし、（とりわけそれが自国の目的にかなうときには）非白人植民地での民衆的な民主主義や経済発展を拡大させるところを粉砕することにその権力を使ってきたのだ。★つまり、貧しい人々の人種差別は悪だが、富める者の人種差別は善だというわけだ。

金と権力をもつ者がいまだ行なっている種類の人種差別——たとえば、かつての「白人の重荷」（「野蛮人にみずからを統治する能力はない」というのが基本的な意味〔「白人の重荷」とは白人には植民地あるとする考え〕）とほとんど変わらない発想でさまざまな国の天然資源をまるごと略奪すること、あるいは人種的に不平等な法と監獄制度によって金儲けをすること——は、はるかに極悪でその被害も甚大だ。だが、こうした形の人種差別は、呼び名による単純な人種差別にくらべほとんど注目されることがない。

非常に多くのテレビ視聴者の前で、チェルシーのジョン・テリーがクイーンズ・パーク・レンジャーズのアントン・ファーディナンドを「黒人マンコ野郎」と呼んだこと〔二〇一一年一〇月三日に開かれたサッカー協会と代表チームの上層部が、二〇一二年のヨーロッパ選手権にアントン・ファーディナンドの兄リオではなくジョン・テリーを招集すべきかという問題に曖昧な態度をとったことや「最終的にジョン」が招集された〕、職場でほか

の選手に人種差別的暴言を吐くジョン・テリーのような人物が代表チームのキャプテンであることにイングランド全体が喜びと誇りを感じていたことは、人種というものがいかに機能しているかを議論する際に大変興味深いケーススタディとなる。もし代表チームが即座にジョン・テリーを離脱させ、かわりにリオを選ぶという決定をしていたら、リオが有能なのは明らかであってもきっとイングランドじゅうが非難の大騒ぎになったはずだ。

二〇一七年のイギリス総選挙の選挙運動期間中、インターネット上のレイシストたちは、黒人女性の国会議員であるダイアン・アボットに「この太った黒人ビッチを吊るせるぐらい頑丈な木があれば、すぐさま縛り首にしてやる」という言葉を投げつけた（これはアボットが日頃から受けている数多くの人種差別的、性差別的な侮辱のほんの一例である）。イギリスのレイシストのなかでもとくに単純な連中は、こうした言葉によってかれらがアメリカの同志との間に感じている精神的つながりをうまく表現したつもりなのだろう。

だが実際には、アメリカと違ってイギリス国内で黒人の縛り首は決して一般的ではなかった。皮肉なことに、イギリスの歴史上縛り首にされた人々の圧倒的多数は白人であり、もっぱら金持ちの財産に手を出した罪で国家に絞首刑にされた貧乏人[★]だったのだ。ああ何という皮肉、何と自分の祖先に敬^{うやまつ}わない連中だろう！

それでもやはり、人種にはヒエラルキーがあるという考えと、それとセットになった「白人は生まれつきほかの人種より優れている」という思想は、貧乏人がつくりだしたものではないのだ。イギリスと世界中で人種のヒエラルキーを維持するために中心的な役割を果たしている日常的な

人種差別を許してはならないものの、そこで批判をやめてはならないのだ。

民族的偏見は数千年にもわたって存在してきたし、おそらくはこの世のあらゆる社会に何らかの影響をおよぼしているだろう。だが「人種」というものの発明、あるいは少なくともその明文化は、一八世紀から一九世紀にかけて進められた欧米中心主義的なプロジェクトなのである。イギリスの知識人はそのなかで中心的な役割を果たしたのだ。

またイギリスは、人種差別的な世界規模の帝国を介して、白人至上主義を一定期間、政治の支配的潮流に育てあげた先導者となった。だが公の場で人種差別について議論したり、ましてや白人至上主義がイギリスの歴史に大きな潮流として存在している事実をあえて指摘したりすれば、イギリス史を研究しているという一部の人々に憎悪をもって迎えられることになる。そうした歴史家はイギリスの歴史を無批判に称賛することを望んでいるようだ。

だが俺はいつたい何に文句を言っているのか？ そんな疑問が出てくるのは当然だろう。何だかんだ言っても、いまのところ俺の人生はかなりうまくいっているのではないか？ そのとおりだ。俺はこれまで述べたような歴史の影響を受け、困難を抱えた家庭に生まれながらも、大人になってからは自営の起業家としてずっとうまくやってきたし、独立系のアーティストとして世界中を回った。ろくに大学に通わなかった人間ながら国内のほとんどの大学で講演した経験もある。俺は統計的にみて、全国統一試験 GCSE 〔英国で中等教育修了時の一六歳で受験する学力認定試験。大学進学を希望する場合、最大二〇科目のうち最低五科目で一定以上の成績をおさめる必要がある〕 で五科目合格を達成する確率がもっとも低い集団に属するのだが（学校の給食費が無料になって

いる白人および「人種混合」の男子は、同じく給食費が無料になっている「完全に黒人」の男子よりもさらに合格率が低い)、俺は一〇科目合格を達成し、最高評価であるA*(Aスター)がとれた科目もいくつもあった。また数学のGCSEには通常よりも一年早く合格し、王立研究所の数学上級クラスを受講していた。

俺は特殊なのだろうか？ 俺は同世代の多くの人々と自分を分ける特別な何かをもっていたのだろうか？ 俺の存在そのものが、イギリスがまさしく実力主義の国であって、努力さえすれば「成功」するという証拠なのか？ 「アメリカンドリーム」のイギリス版があるとしたら、俺はその夢を実現した小さな一例なのか？ 俺のきょうだいについても同じだ。姉は、みなさんご存じだろうミス・ダイナマイト「歌手でラッパー、イギリスで多くの音楽賞を受賞している」だ。妹の一人はベル・ウィリアムズという受賞歴のあるスタントウーマンで、映画史上屈指の大作にもいくつか出演している。一六歳の弟はつい先日、GCSEで俺と同じく一〇科目合格を果たし、将来は脳科学者になることを夢めている。社会的流動性「教育などをつうじて貧困層が中、上流層に上がる社会的可能性のこと」などほとんど嘘だと主張している俺だが、貧困から這い上がり裕福になりつつある「人種混合」の俺の家族は、その新たな生き証人なのか？

現実がそう単純ならどれだけよかっただろう。「例外が規則の存在を証明する」ということでなければどれだけよかっただろう。

この本は、一見個人を超えた力——すなわち人種と階級——が、これまで、そしていまもなおどのように俺たちの人生に影響を与えているのかを検証することを目的としている。そして俺自身、少しでも人生のめぐり合わせが違っていたなら、現在の状況とはまったく異なるが世間にはかなりありふれた物語——繰り返される暴力沙汰、刑務所暮らし、非正規・不安定・低賃金の仕事——を語っていたかもしれないということについて考えるための一冊である。

インナーシティの生活によくある成り行きやそれについてまわるあれこれと同時に、俺は幸運にも多くの得がたい機会に恵まれた。俺はパンアフリカニズム「奴隷化と植民地支配の共通の歴史をもつアフリカ大陸内外の黒人の連帯と解放をめざす思想・運動」の土曜学校に通い、公立学校では学べないことを学ぶことができた。継父はハックニーエンパイア劇場「戦後カリブ系移民が多く移り住んだロンドン東部のハックニーにある有名劇場」の舞台監督だったので、俺は裕福な家庭の子どもをはるかに上回る数の舞台を観て育った。両親は政治意識が高く、きわめて教育熱心で、俺を守るために必要となればいつでもであろうと教師と闘ってくれた。

家のすぐそばにあった公立図書館には、俺の子ども時代のいちばん楽しい思い出のいくつかがある。俺は本というものをほとんど異常と言えるほど愛しているのだが、この図書館はその愛を俺に植えつける上で小さくない役割を果たした。俺はすでにとても読み切れないような数の本を持っていて、それでもしょっちゅう本屋に行き、新刊本を見て、拾い読みし、印刷したばかりの紙の匂いをかぐのだ——悲しいかな、俺は度を超えた本の虫なのだ。もし身のまわりに人々の税金で運営される公立図書館がなく、そこに喜んで連れていってくれる母親がいなかったなら、あなたがいま読んでいるこの本が書かれることはおそらくなかっただろう。だが、こうした幸運があったにもかかわらず、俺は恐怖心からナイフを持ち歩き、放課後にはたわむれに軽犯罪を起していたのである。

黒人意識「九六〇年代後半から南アフリカのステイプ・ビコらが展開した思想・運動。黒人アイデンティティを肯定する意識改革をすすめることで白人の人種差別と闘うことをめざした」は俺をナイフから遠ざける

ことはなかったし、ストリートで俺を守ってくれることもなかった。だが黒人意識は間違いなく俺の自尊心を形づくり、コミュニティに根ざした倫理的指針を与えてくれた。こうした要素を無視して自分は「自助努力」で成功したのだと言い張るのは簡単だが、実際にはそんなことはありえないのだ。

数えきれないくらいの教師や地域の活動家が、人生の道筋を切りひらいていくためのツールを俺に与えてくれた。サッカーのコーチは、俺にプレーの仕方を教えることで俺をトラブルから遠ざけてくれた。べつに俺の人生の成功には、自分の努力や修練も、払った犠牲も関係ないと言いたいのではない。そんなことを言うのは馬鹿げているだろう。しかし俺が言いたいのは、こういった個人の資質すら実は他者からの助けや励ましによって育まれたものであって、そうした支援、それもほとんどボランティアの人々による支援がなければいまの俺はなかったということだ。俺が統計上もつともありうる人生——つまり、すでに死んだか刑務所暮らしの労働者階級の黒人男性——を送っていたかもしれないと言うのを聞いたら、俺たちとは違う子ども時代を過ごした人々は大げさだと思うかもしれない。だが俺たちと同じ境遇に育った人なら俺の言っていることが本当であることがわかるし、ほんの少しのことでどれほど運命が変わるのかをよく知っているのだ。

俺は家庭に父親のいない環境で育ったが、父とは連絡をとりつづけ、休みの日にはよく父と父の新しい家族のところに遊びに行った。継父も、母とつらい形で離婚するまでずっと前向きな影響を俺に与えてくれた。また、ほかの地域ではなかなか見られないような文化の混交が日常に

なっているカムデンらしく、俺にはなんとアンドリュウというキプロス系の「おじさん」までいて、一〇代の日々を通して面倒を見てもらった。だが俺が人生で出会ったあらゆる男性のなかで、俺の成長にいちばん大きな影響を与えたのは、俺の名づけ親であり、俺がこの本を捧げる人物、「オフスおじさん」だ。オフスおじさんは厳密には単なる家族の友人なのだが、多くの親が自分の子どもに果たすよりもずっと大きな役割を俺の人生において担ってくれた。

オフスおじさんは俺の両親と大変仲が良く、俺やきょうだいを心から愛してくれており、母が癌にかかったときには、もし死ぬようなことがあれば俺たちを引きとろうとまで言ってくれた。オフスおじさん自身が三人の子どもを抱え、ハックニーの公営住宅に住んでいたにもかかわらずだ。一般に黒人の父親は不在の存在だと考えられがちだが、オフスおじさんのような男性もどういうわけか存在するのだ。

ほかにも俺たちについて語る上で触れねばならない幸運があった。しかしこれは俺の家族に限ったものではない。俺は五歳ではしかにかかったが、無料で治療を受けることができた。俺が一〇歳のときに母は癌になったが、やはり無料で治療を受けられた。いずれも国民保健制度のおかげだ。また俺は補助金を受けてローマとバルセロナへ修学旅行に行き、おおいに見聞を広めることができた。

時代や場所が違えば、俺のような社会的、経済的階層に生まれた人間は、家族を食べさせていくために学校をやめて働かなければならなかったろう。実際、俺の親友の一人である著名なブラジル人ヒップホップアーティスト、MCマレシャル (MC Marchal) がそうだったし、世界中

の無数の子どもたちも同様だ。これは子ども個人の責任ではまったくなく、ただ「生まれ」というくじにはずれてしまったことによる。俺は部分的にはイギリスの不正義やその階級的、人種の抑圧の産物だが、同時にそうしたものに對する反撃と、その闘いに押されて権力者が行なった妥協の産物でもある。俺は帝国の産物であるだけでなく、福祉国家の産物でもあるのだ。

一九八〇年代初頭に生まれた俺の年齢集団は、黒人としてはある種中間の位置にいる。俺の年齢集団は一昔前の人種差別を覚えていた最後の黒人イギリス人にあたるが、親の世代がその人種差別を（少なくとも主要都市においては）徹底的に打ち負かしてくれたおかげで、俺たちは幼いころにそれを目撃するだけですんだ。一九八一年に生まれた世代は全体的に言って一九七一年生まれよりもはるかに貧しいが、黒人の場合、話はややこしくなる。俺自身もそうだが、俺の世代には、ほんの一〇年前に生まれていたならありえなかったチャンスを得ている人々がいる。また現在、イギリスのブラックミュージックがかつてなく国際的な脚光を浴びている。

イギリスじゅうのあらゆるコミュニティに属する多くの人々が、政治家よりもストームジ（Stormzy）〔ガーナ系のラッパー〕やジェイミー（Jme）〔ナイジェリア系のラッパー〕が世界をどう語っているかに注目しているし、イギリス政治を変化させるにあたって「Grime4Corbin（コービンのためのグライム）」キャンペーン〔二〇一七年の英国総選挙において、ストームジ、ジェイミー、AKALAらのグライムラッパーが当時の労働党党首ジェミー・コービンへの支持を呼びかけた〕が大きな役割を果たしたことは——まだそうなっていないければ——いずれ必ず多くの研究者に学問のインスピレーションを与えることになるだろう。

同時に、進歩がもたらした変化は、奇妙な形でも表れる。

俺が初めて家賃の高い部屋を借りたとき、不動産屋の黒人男性に「幸運だと思わないとな。普通俺たちみたいなカラード〔英米の白人社会で使われた、アフリカ系の人々に対する蔑称〕はこんな部屋は借りられないんだから」と言われ、口論になったことがある。彼は、黒人が数千ポンドもの大金をぼんと払えるのは普通ならありえない幸運だと考えていたようだ。これは極端な卑屈さの一例だが、ロンドンをはじめあちこちに住む若い黒人が物質的に豊かになるにつれ、階級と人種の関係はより複雑になり、人々の思い込みを裏切りつつけることになるだろう。

二〇一一年、チャンネル4〔英国の公共テレビ局〕で司会を務めた『ライフ・オブ・ライム』という番組で、有名な黒人詩人であり活動家でもある人物にインタビュをしようとしていたときのことだ。俺と撮影クルーが準備を終えたとき、彼は尋ねた。「プロデューサーはどこにいる？」。俺と一緒にいた黒人女性を指した。すると彼はまた尋ねた。「ディレクターはどこ？」。俺は一緒にいた黒人男性を指した。彼は一呼吸置いて言った。「すごいな。俺が若いころには絶対にありえなかった」。つまり黒人だけで構成された撮影クルーが、だ。もちろんBBCやチャンネル4、あるいはほかの大企業のなかを少し見てみれば、黒人が増えたのはごく一部のことだとわかる。こうした企業の人員構成は、その企業が拠点を置く都市の民族構成をまったく反映していないのだ。

だがそれでも、詩人としてのキャリアのすべてを人種差別との闘いに費やしてきた人物でさえ「白人の責任者」を探してしまうというのは、ロンドンのような都市にいても、それまでの経験が現実の認識に影響を与えてしまうということをしめしている（その詩人に公正を期すために

言っておくと、その番組の責任者には白人もいた。かれらは番組上層部のシニアディレクターやシニアプロデューサーだったが、たまたまその日は撮影現場にいなかったのだ。

その詩人と世間知らずの不動産屋の出来事が示唆^{しき}するのは、黒人の中流階級が俺たちの親の世代にはありえなかったような規模ではっきりと生まれつつあるという事実だ。この傾向は、俺の友人たちの職業——クラシックの作曲家、大学教授、W10^{〔ノッティンガムヒルを一部含むロンドン〕}エリアのバーのオーナー、外傷外科医、弁護士が二人ほど——にも反映されている。いずれも黒人イギリス人二世もしくは三世だ。ただしこれはただ喜んでいればいいという話ではない。なぜなら俺の友人たちがしめす黒人の職業の変化はイギリス産業が全般的に縮小しつつあることの反映ともみなせるし、また友人たちのような例外的ケースは、黒人下層階級^{アンダークラス}のますます深刻さを増す現実とも隣り合わせであるからだ。この黒人下層階級はいま、それよりはるかに長い歴史をもつ白人下層階級と永久的な融合を果たしつつある。

この融合のプロセスはギャング好きの報道機関によって報道されているが、そこで黒人少年はギャングと同義であるかのように描かれている。しかし暴力的な労働者階級の若者からなるギャングはゆうに一〇年以上イギリスに存在してきたのは明白な事実であり、現在でもこういったギャングが目立つのは、イギリス内でもほとんど黒人のいないグラスゴー^{〔スコットラン〕}やダラム^{〔イングランド〕}、クリーブランド^{〔イングランド〕}、ベルファスト^{〔北アイルランド〕}など脱工業化を経て荒廃する貧困の中心地がほとんどだ。

もちろん、成功した黒人が少しいたところで、イギリスにおける人種と階級の関係はほとんど

変わらないし、場合によってはそれを固定化することになる。一部の黒人の成功は「成功できなかった」貧しい人々を非難するために使うことができるし、ときには「中流階級」の安定した生活を送る黒人自身によって実際にそう使われている。現実の社会の仕組みを誠実に認識するかわりに、この社会は平等で、十分なチャンスがある——「やる気をだして一生懸命努力すれば誰だって自分のようにになれる」——と見せかけるためにも使うことができる。少なくとも俺には、ほとんどの人々は貧困を憎むよりも貧しい人々を憎んでいるように見える。

「やる気をだせ」という言葉は「自助努力」を迫る典型的で昔からある決まり文句だが、人は生まれつき優秀でもろくでなしでもなく、「悪い」選択さえ文脈のなかで行なわれるということを見無視している。たとえばギャングに属する俺の「おじさん」たちはみな、学校をやめるなど俺を励まし、まだ子どもの俺が進化論を暗唱すれば小遣いをくれ、俺がおじさんたちのように、つまり犯罪者になろうとしたらおまえをぶっ飛ばすと脅しさえした。俺の親友に引退したサッカープレイヤー^{レミアリーグ選手がいて、悪名高きストーンブリッジ団地}^{〔ロンドン北西部ブレント区にある黒人が多く住む公共住宅地。ロンドンのなかでも高い貧困率と犯罪率で知られる〕}の出身なのだが、その友人は子どもころその地域のドラッグ売人全員の申し合わせで、かれらが活動する一帯を立ち入り禁止になったという。売人たちは友人のもつ可能性、自分たちとは違う人生を生きる可能性をその友人に見出したのだ。そのようにこうした「ろくでなし」たち——かれらは実際に犯罪常習者だった——は、俺と友人を守ったのだ。

一方、白人中流階級出身の何人かの教師のせいで俺の学校生活はひどくつらいものになった。かれらは本来かれらが育てるべきはずのもの、すなわち俺の知性をめぐって俺をいじめた。また

警察は、俺の学校の成績や明らかなオタクっぽさ、将来の夢は宇宙飛行士であることなどにはまったくおかまいなく、メディアが煽ったヒステリーにもとづいて俺に身体検査を行なった。人々は、街角――グラスゴー東部からロンドン東部まで――のドラッグ売人や労働者階級の犯罪者には厳しい目を向けるが、投資銀行の銀行員という職業は完全に合法で有望な仕事であると考ええる。たとえその銀行が麻薬カルテルの資金洗浄を請け負い、テロリズムの資金源となり、世界の武器取引や燃料戦争、また石油流出や土地収奪を促進し、地球を破壊しようともだ。

俺は何もそのシステムのなかで働いている人々を非難してはいるわけではない。なぜなら俺自身、自分の消費行動によってある程度の共犯関係にあるからだ。ただ俺が言いたいのは、何が犯罪かは倫理ではなく「法律」にもとづいて決められているということだ。そして言い換えれば「法律」とは権力者によって定められたルールであって、普遍的な正義の指標ではない――そもそもそんな指標があればだが。奴隷制やアパルトヘイト、ジムクロウ「米国南部にあった人種隔離に基づく黒人差別の法体系の総称。米国の黒人差別体制一般を指すこともある」、夫が妻を強姦する権利、同性愛者に対する化学的去勢などは、歴史上きわめてごく最近のある時点では「合法」だったということは、あえて指摘するまでもないだろう。ナチスドイツのほとんどの所業すら、当時は「合法」だったのだ。

また、「やる気をだせ」という決まり文句は、多くのイギリス人（および世界中の人々）が貧しい生活を送っており、さらに緊縮財政「医療・福祉をはじめとする歳入を厳しく抑制する財政政策」――階級的収奪を遠まわしに意味する専門用語――のもとで、何の罪もないのにどんどん貧しくなっている現実を無視している。自分の給料は抑えることのない政治家によって、賃上げ率をインフレ率未満の一パーセントにま

で抑えられている看護師に、同じきつい仕事を変わずこなししているのに年々ますます貧しくなっているという事実を変えることができるだろうか？

八〇年代以降ある意味で大きな進歩があったのは事実だ。評判の悪い「ポリティカル・コレクトネス」のおかげで好き放題に暴言を吐く差別主義者が放置されるという事態ははるかに少なくなったし、郵便物に入っている銃弾の数も減った。人々はサッカーイングランド代表チームの半数がつねに黒人選手であることに慣れた。黒人の政治家も何人かいるし、ロンドンの市長はムスリムだ「パキスタン系移民二世で労働党政治家のサディク・カーン」。

だがこうした大きな変化にもかかわらず、本質的な問題は変わらず存在している。八〇年代的な出来事が二一世紀の装いのもとますます回帰しているのだ。二〇一一年に起きたイギリス暴動は、明らかにそのような過去の出来事の回帰である。その暴動は、警察が黒人男性のマーク・ダガンMark Dugganを射殺し、その後彼の家族やコミュニティに適切に対応しなかったことで火がついた。事件後四八時間というきわめて重要な時間に、彼が最初に警官に発砲したという警察の虚偽の説明をメディアがそのまま繰り返したことは、国家権力とマスコミの役割が八〇年代と現在でほとんど変化していない証拠である。

二〇一七年六月にロンドンの高層公営住宅グレンフェルタワーで起こった悲惨な火災は、緊縮財政への究極かつもっとも陰惨な賛辞だったと言えるかもしれない。最低でも七一人の命を奪ったこの火災を引き起こしたのは、間違いなく貧しい人々の命に対する組織的な軽蔑だった。

火災後の国家の反応、あるいはまったくの無反応と、市民からの圧倒的な支援との落差は、俺

がこれまで直接目にしたもののなかでもっとも奇妙なものの一つだった。グレンフェルタワールの犠牲者について議論するネット上のスレッドに必ず出てくる人種差別的侮辱や敵意に満ちた憎悪の嵐——犠牲者には圧倒的にムスリムが多かった——と、グレンフェルタワールの火災で亡くなった家族と火災直前の時期にロンドン橋とマンチェスターで無差別殺傷事件を起こしたテロリスト【「同事件」とも、イスラム主義武装組織ISISが犯行声明を出した」】とを概念上結びつける言説は、二一世紀のイギリスで「ムスリム」が人種化された文化本質主義【「同じ文化に属する人間は不変的に同じ考え方や行動をとる」という移民排除に結びついた考え方】的カテゴリーとなったことを雄弁に物語っている。

俺がこの文章を書いているのは、火災から七カ月が経過した時点だが、生き残った家族にはいまだに住居が与えられていない。一方で、何百万ポンドという寄付がかれらのために集められ、地元自治体は三億ポンド【「日本円で約四九〇億円」】の資金をもっていることがわかっているのだ。俺はグレンフェルタワーと同じ通りに五年間住んでいたが、建物にはスプリンクラー、正常な火災警報器、消火器などが備えられ、数カ月に一度は整備員が点検に来ていた。ロンドンの同じ通りに住んでいても、ほんの少し金があるかないかの違いで、生と死の線引きがなされてしまうのだ。

八〇年代の政治的「論理」が回帰していることをしめす兆候はほかにもある。すでにイギリスでは自国民を刑務所に入れる確率がドイツの二倍、またフランスより三〇パーセントから四〇パーセントも高い。それでもロンドン警視庁の警視總監は「二〇代の凶悪犯」により厳しい刑罰を科すことや、大規模なストリップ&サーチ作戦を復活させることを主張しているのだ。イギリスの受刑者数はこの三〇年で八二パーセント増加し、女性受刑者数は九〇年代とくらべて五〇パー

セントも増えているが、これに対応するような重犯罪の増加はなく、受刑者の急増には説明がつかない。★11 厳罰を科すだけで犯罪が減るのなら、アメリカにはいまごろ犯罪がなくなっているのではないか？

イギリスの刑務所は一割が民営化されており、またさらに多くの刑務所で囚人労働力を利用するところが増えていることを考えると、警視總監の非論理的な右翼的道德のアピールは、まるで「利権漁り」のようにも見え、これから物騒な時代が来る兆候をしめしている。イギリスで受刑者がさらに増加するなら、黒人イギリス人——ただでさえ白人イギリス人とくらべて投獄率が七倍も高く、司法制度のあらゆる段階で冷酷な扱いを受けている人々——が、その圧倒的多数を占めることになるのは明らかである。★12 それ以外は、あらゆる民族の貧しい人々が占めることになるだろう。

昨今英米帝国では、ほかにも世界を揺るがすような出来事が起こっている。女性や子ども、老人を含む黒人アメリカ人が警察に殺害され、その様子が映像に残っている。ナチスやKKK、白人至上主義者に堂々と支持されるドナルド・トランプがアメリカ大統領になり、支持者が殺人を犯してもまともに非難をせずにいる。またトランプは、アメフト選手であるコリン・キャパニック【「二〇一六年、黒人への警察の暴力に抗議し」】をはじめとするアスリートの平和的な抗議を非難した。イギリスのブレグジット運動【「英国のEU離脱をめざす政治運動。二〇一六年の国民投票では離脱支持が僅差で多数となり、離脱が決定した」】の主張には自民族中心主義と人種差別がにじんでいる。イギリス連邦諸国からの移民が何人も不当な国外退去を強いられた。そして二〇一五年の「難民危機」【「中東やアフリカから戦禍を逃れ欧州に向かう難民が急増し、EU諸国に政治危機を引き起こした」】がいったいどのように扱われ報道さ

れたか（NATOがリビアを破壊したことへの言及はもちろんない）。こうした出来事を公平に見たならば、人種差別の概念および実践が近いうちに消滅するようなことは絶対にないことは確かだ。

こうした潮流のなかに俺は生まれた。俺はそれを自分でつくったわけでも新たに発明したわけでもないし、自分は客観的だと言い張るつもりもない。自分は個人の経験かたよを超越し、一切の偏りなく世界を見ているのだと主張する歴史家や学者は多いが、俺にとってはそんなことが可能だという考え自体が馬鹿ばかしい。俺たちはみな、自分が触れ、経験したことに影響される。俺たちにできる最善のことは、自分の存在についてまわる偏りのなかから、それでも可能なかぎり公正であることをめざすことだ。個人的なことは政治的なことであり、この本は俺がよく口にする人種や階級という言葉に具体的な形を与えるための一冊だ。この本が語るのは、イギリスの階級制度が帝国や白人至上主義とどのように長く複雑な関係を保ちそこから利益を得ているか、そして一九八〇年代初頭のイギリスで「黒人」の父と「白人」の母との間に生まれた子どもの人生経験において、そうした社会的要因がどのように姿を現し人生に影響を与えたのかということである。